

日本軍の面目躍如たる者があつた。

五月六日頃より首里(軍司令部)を中心とする複合陣地周辺は敵が接近し、憲兵隊も直接戦斗部隊に改編しなければならなくなつた。軍からは首里附近の壕に在る一般県民を後方知念半島方面に誘導退避を命ぜられた。どうせ死ぬなら自宅近くがよいという島民に軍司令官の意図を示して実行に移つた。五月九日午後九時一ヶ月以上住みなれた壕を出て谷間を縫うてゆく舗装道路(県道)は敵の不発弾がゴロゴロしている。よくもこんなに打ち込んだものだと思心する。隣り壕にいた赤尾大尉(軍通信隊、戦死、鹿児島市)から貰つた地下足袋が足に合はずに痛む。こんな山中でも弾丸は見舞い、負傷者は続出する。負傷して二日位でウジがわく。排膿はウジが食べてくれる。

軍司令部神航空参謀が、この附近から内地に脱出して大本營に航空兵力の使用を懇請に行くというので糸満漁師に丸木船と漕手の注文である。……(無事九死の中を脱出に成功)

五月二十五日、軍司令部も島尻に転進するとの情報を得たがその場所も通路も分らない。その頃から負傷兵は病院の位置も分らず、両足を切断された重傷者が滑り且ころびながら病院を探している等々正に地獄絵図である。漸く天然洞窟内に病院を探し出す。壕の入口にはもう悪臭が鼻をつく。薄暗いローソクの下に何

百とも知れない重傷者が呻吟している。苦しみ耐え兼ねて手榴弾で自決する者が相当あるとの事であつた。一氣に戦死した戦友を幸福だつたと羨むのも激戦地の常とは云え、余りに悲痛であつた。

六月二日夜、軍司令部に連絡に行く事になつた。壕を出ると外は昼間の様に敵照明弾で明るかつた。百米位出ると機関銃の射撃が始まつた。もう周囲は完全に敵の手中にある。翌朝壕の上は完全に乗り取られ過ぎになると壕の掃討が始まつたらしい。吾々の壕の上にも敵兵が来るのが見えた。

愈々最後の決を迫られる時が来た。脱出——私は先頭に立つた。約二ヶ月白日を見なかつたので眼が痛む谷間から山腹に出たが、山腹は敵の前線で機関銃の陣地である。いつの間にかこれだけの準備をしたのかと夢のように思われる。

一般民はこちらに行けと指示される。そこには二世がいて検閲して証明書をくれる。私は学校教員城間一夫という証明を買つた。翌日知念半島が一般民の居住地と定められたが、家は無し木蔭に寝る者が多い。

私は司令部への脱走の機会をねらつた。夜間行動は無条件射殺である。二、三日すると密告されそうになつて、危険だから脱出せよと教えてくれた人もあつた。思い切つて実行したら、すぐ検閲所にひつかつた。仮收容所に入つたけれど間もなく出してくれた。その

足で漸く司令部の線まで辿りついた。警戒が厳しい。海岸の絶壁沿いに出ると、附近一帯死人の山である。

陸海からの射撃を警戒しながら、死人をよそおい一寸又一寸と進んだ。至る所の死角の壕には四、五人づゝわが軍人がいる。司令部の所在を聞くけれども確実な所は知らぬという、漸く聞き出して行つたら、そこは軍経理部である。夜半司令部に辿りついた。二十一日である。曙部隊長平賀中佐(鹿児島市)が斬込隊長として出かけられたという事であつた。

三十米行かぬ所に敵の機関銃陣地がある。命の綱の無電機も十一時半を以て全部終つたらしい。夜明けと共に牛島司令官以下の自決である。

■摩文仁の月

月齢十二日上弦の月は青白く南海の海原を照しているが、八九高地の奇岩は米軍の間断なき物量の攻勢に姿を変へ、常夏の島の緑の肌も鉄火のるつぽと化している。

斬込隊は各壕より米軍陣地に突入して岩頭を紅に染めていた。軍司令部の各部では先任者を中心に遙かに東方を拝し、天皇陛下万才の声が岩を伝つて聞えてくる。或は砲声の間に海行かばの荘重な歌が起る。各人の頬——砂塵にまみれた——ゆえもない涙が後から後から流れる。三時頃各首脳部を始め残余僅かな備人まで両閣下に暇乞の挨拶を申上げる。牛島將軍は一

死んではいけないぞ」と論じてをられる。

四時——將軍はこゝ九旬の戦斗衣を通常礼服に着代へられた。うす暗いローソクの光に、純白の手袋が目

に泌みる。長参謀長は白い肌着に自筆で

忠則尽命 尽忠報國 長 勇

と記したのを着用され無帽である。

「さあ——軍司令官閣下、先が暗いかも知れませんが、長が先に参りませう」

「頼みます。これから暑くなるでせうから団扇でも使ひませう」

沖繩製のクバ団扇を持った牛島將軍は静かに扇ぎながらニコニコして歩かれる。死を見る事帰するが如しとはまさしくこの事である。

午前四時十分、洞窟開口部に姿をあらわされた。汐の香がぶうんと匂う。頭上から約三米の岩上には、すでに占拠している米兵が自動小銃等持つて構えている筈だ。

開口部から十歩位のところには、両將軍用の蒲団の上に着布が敷いてある。自決の場所である。先づ参謀長が坐り、ついで軍司令官も座られた。薄暗いのはるか東天に向つて遙拝される。副官がそれぞれ軍刀をお渡した。古式に則る切腹である。

「えいッ」

坂口大尉の白刃が一闪また一闪。両將の首級が飛ぶ

吉野副官が震える手付で首級をさげた——と追撃
砲弾が炸裂し、副官も共四散した……
(元沖繩軍憲兵)

逸話(四)

★首里城の牛島將軍宿舎には、無聊を慰める為にと、島民が目白籠を三つ持つて来ていた。強い南国の陽を浴びながら、一心に小鳥に見入っている姿は正に一幅の絵を思わせた。この目白も敵上陸の寸前には大自然に放された。★摩文仁の洞穴では、司令官は黙然と坐して、小刀で、齧節を削つてをられる事がよく見受けられた。
★摩文仁高地に軍司令部が後退してから、葉丸兼教参謀は「軍の組織的な抵抗が崩れた後、各参謀は米軍占領地区に潜入して各所に残存する将兵を合して遊撃戦を継続すべきである」として実行計画を差出した。
葉丸参謀は鹿兒島市葉師町出身。葉丸示現流宗家。鹿兒島一中以来の牛島將軍の教え子である。六月十八日夕、司令官の命を受けて敵陣に突入していった。陸士区隊長時代は、生徒から一発パンの敬称を奉られていたが、葉丸氏のビンタ一発で生徒はひっくり返る程威

力があつた由。好漢賊に惜しい哉。
★人事を尽して策無きに至るや、牛島軍司令官は祖国日本に対し、訣別の辞と共に左の如き辞世を送られた。
秋を待たて枯れ行く島の青草は
皇國の春に蘇らなむ
矢弾尽き天地染めて散るとても
魂かへり魂かへりつゝ皇國護らむ
★今年の正月急死された福島浩氏(鹿屋市在、鹿一中出身)は軍医として沖繩戦に参加された勇士であつた。御不幸の寸前まで近所の子供達を集めて実戦談を聞かされたと言ふ。牛島將軍の人徳が將士に滲透して、逆境の中にも善謀勇戦して散つていった同胞の魂を決して死なしてはならないと叫び続けてをられたのである。
★昭和二十七年八月、牛島、長岡將軍自決の地摩文仁八十九高地の断崖の上、太平洋に面して「黎明之塔」が建てられた。その以前には兩將の木を墓碑が建てられていて、傍に「去にし日の憂きを残さず君よまた速久に平和の神となれかし」の歌碑が建てていた。

米軍戦史オキナワから

米軍の見た

牛島將軍の最期

宮崎 周一(抄訳)



日本軍が首里の守備を撤して沖繩本島の南端に向う退却は史上稀に見る困難な作戦であつた。然るに日本軍は難局と悲運とに屈せず最後の守備の一角を米軍に奪取せらるゝまで驚嘆すべき軍紀と秩序とを保持し続けた。

日本軍將兵の大部は実は首里の守りを失つて沖繩南端に後退した時に最後の勝利に対する希望を失つてしまつたのである。

四月頃には轟然と響き渡つた砲声もやがて六月十二日頃以後米軍のヤエブ嶽ヤエ嶽に対する歩戦砲航の激斗により堅陣の一角また一角を失うようになつてからは微かなさゝやきに交つてしまつた。個人装備も人数だけ行きわたらなかつた。衛生材料は欠乏し負傷者は或は死期を待ち或は自決してしまつた。

此の窮状に陥つた志氣をやなぎ止めた唯の頼みは空艇部隊をもつて六月末頃大挙逆上陸を敢行する予定で……台湾より第九師団を招き寄せた艦隊及航空隊の飛行機五百機をあげてこの大攻勢に参加する。あるう風評であつた。
日本軍の士氣沮喪を図る手段として心理戦争の指導に關しては作戦発起に先立ち研究準備を重ね既四月上旬の上陸実施以前に着手せられたのであるが、特種作戦戦末期に及びこれが実行を強調され、上陸作戦の間にこの沖繩本島に投下された伝單は突如百万枚の多きに及んだ。六島中環状の伝單の多きは米軍に対する信頼の念を喚起するに及ぶ敗戦意識を伝播することにあつた。六月十日朝敵機の後方に投下

れた伝単は「バツグナー」第十軍司令官より敵将牛島軍司令官宛日本軍の集団降伏を勧告したものである。文面に曰く

貴軍令下の諸隊は克く善戦敢闘し貴下の歩兵戦術に賞讃と敬意を表す。

貴下は私同様歩兵科出身の將軍として歩兵戦術に關し積年の研鑽と体験を経て……されば本島に於ける日本軍の総ての抗戦力が崩壊に類する事は単に時間の問題に過ぎない事は、貴下におかれても私同様明白に洞察せられるものと信ずる。

固より牛島將軍がこの降伏勧告に応じようなどとは雖しも真面目に期待するものはなかつた。二日を経て今度は別箇の伝單三十万枚が撒布された。それは牛島將軍が降伏に關する提議を拒絶し自己の独断で令下の全軍を破滅に陥らしめんとするものである事を強調し將兵に対し各々自らの道を選ぶべき事を直接に呼びかけたものであつた。更に二日おいて右同様の勧告を行つた。

●牛島將軍と長參謀長の最期

六月二十一日いよいよ最後の時が来た。牛島將軍とその幕僚たちは、島の南端マブニ村附近の標高八九高地……水際に屹立した断崖絶壁の洞窟の中で第三十二軍の組織的抵抗の終えんを迎えた。

恰も此の日米軍第七師團第三十二連隊は東北方から

午前四時いよいよ切腹の時が来た。軍司令官は陸軍中將の盛装を整え、參謀長は白装束を装着してあらわれた。(略)

今しがた輝いていた月は西海の波間に沈んだ。夜明けにはまだ間がある。四時十分兩將軍は洞窟の出口に姿をあらわした。

米兵達は僅か三米上の絶壁に迫っている。洞窟の出口から四米先の処に褥をのべて白布が敷いてある。これこそ兩將軍切腹の式場だ。兩將は褥の上に端座、東方に面して恭しく最後の拜礼を捧げた。副官はそれぞれ刀を呈した。

恰もこの瞬間、聖なる情景の静けさを破つて数発の手榴弾がうなり飛んで来た。絶壁上の敵がすぐ目の下の様子に気がついた。悲壯な掛声と共にきらめく一刀更は掛声と共にきらめく一刀。兩將軍は氣高くも天皇陛下に対する最後の赤誠を見事に果し終えたのであつた。

砲煙全く止んで万物静寂に帰り、満月は廻り來つて南海の波浪を洗うであらう。こゝマブニの里の標高八九高地こそ永久の記録に残る事だろう。

かくて牛島軍司令官と長參謀長の死は沖繩戦役と日本第三十二軍の終えんを印したのであつた。(略)この日六月二十二日朝、第十軍司令部、各軍団各師

海岸沿いに此の断崖高地の頂上に向い進撃し、正午頃にはこの洞窟入口附近に達した。俘虜となつて居る日本將校が自ら進んで牛島將軍宛の降伏勧告状を渡そうとして洞窟入口に行つた時、入口は内部から爆破されて閉塞されてしまつた。もう一つの入口は海に面した断崖の中腹にあつたが標高八九高地頂上の守兵は頑強に抵抗を持續し、米軍は火焰放射をもつてこれを撃滅し、夕刻に到り断崖頂上を占領し得た。この際消費した焼夷剤は五千ガロンにも達した。

牛島將軍は六月二十一日夕刻最後の無電を大本營宛に発した。性熱的な長參謀長は全軍に対し最後迄極力奮戦すべき事を懇望した。(略)

最後の食事がすむと牛島將軍、長參謀長及び幕僚たちは永久の訣別の乾盃を重ねた。盃には首里から携えたとして置ききのスコッチウイスキー、数本が傾けられた。その後の物語は兩將軍の最後を見届けた某俘虜の供述する処にゆづる。

あゝ、かけた月がマブニ村の真上にかゝる頃、兩將軍は地に墜ちた。青く冴えた月は南海の波間に青白い影をひらめかしている。珊瑚礁から真直にきり立つた八九高地の岩の渚にたらなる玉石は鮮血で真紅に彩られて居る。この血汐こそ最後の抵抗を待み米軍陣地に殺到した突撃隊の愛國心に燃ゆる赤誠のほとばしりなるぞ。(略)

団毎に軍樂は「ひらめく星の旗」を奏し、国旗護衛隊は沖繩到る処に国旗を掲げ、桿頭にそよぐ微風は国旗の全幅をおだやかな紺碧の空にはためかした。

△米第十軍司令官バツクナー將軍の戦死
首里の陥落から島の南端附近における日本軍最後の抵抗を打破するまでの間に、米第十軍は戦死一五五五名負傷六六〇二名の損害を出した。軍司令官バツクナー將軍も実にこの犠牲の一人であつた。六月十八日午後バツクナー將軍は沖繩西南端第二海兵師團第八海兵連隊の前線視察所に於て戦況視察中であつた。午後一時十五分敵空対地兼用砲の一弾が視察所の上空で炸裂し、飛散した珊瑚礁の破片は飛んで將軍の胸を打ち忽ち倒れ十分後に息を引き取つた。(元大本營勤務)

おことわり

本書の原稿は、すべて故遠矢良知氏が集められたものです。が没後すでに六年、一部散逸した分もあるようですが、その点寄稿して下さつた方ならびに読者の御諒承を願ひたい。
(編集者)

—四〇年前—

東京麻布の牛島將軍の正宿先には従弟の牛島寛、藤田禎藏（鹿兒島市下流橋町、母董商）永田利之（鹿兒島市柿本寺、永田産婦人科）の諸氏が宿をもちた。この写真の、相良三介（鹿兒島市伊敷町、調停委員）谷口午二（鹿兒島市立美術館長）長谷場、木之尾の諸氏いづれも同方限の学会出身である。

牛島將軍は三層八帖の間に起居し、重厚且勤勉な生活を送つてをられたといふ。この写真は、そのうちわが撮つたものか、そのゆえも分らぬが、現存されるオランダのそのかみの美濃藩の証明するものにして貴重である。牛島將軍の影を、若き時より、今もいかに全員の端正な姿で、若き時より、今もいかにない。こんど、その中心に、牛島長者牛島將軍の影を、若き時より、今もいかに教育が測々として感じとられる。



藤田 禎藏
(海城中)
牛島 寛
(陸軍大学)
相良 三介
(東大)
谷口 午二
(東京美術)
永田 利之
(蕨恵大)
牛島 寛
(東京農大)
長谷場辰夫
木之尾義雄

沖繩戦の意義

田畑与三郎

慶長五年夏徳川家康を首將とする東軍の進発に方り爾後の状況推移を予断した家康は畏敬する家臣の長老鳥居元忠をして京洛の重鎮伏見城を守らした。石田三成を盟主とする西軍は東進に先だち此の城を攻囲した元忠は勸降使を退けて敢然城を死守し西軍の東進を十日遅滞せしめたが衆寡敵せず元忠始め城兵尽く城を枕に討死した。併しながらこの十二日の時間の余裕は下野国小山より軍を起した東軍をして濃尾平野に進出せしめて有利なる戦畧態勢を採らしめ爾後に於ける関ヶ原の戦勝の基因を作つた。元忠死して瞑すべきである。

沖繩戦に於て牛島軍司令官以下陸海の將兵並沖繩島民は勇戦敢斗遂に散華したが米軍の本土進攻を遅延せしむること三箇月。之れがため本土決戦準備は着々遂行せられた。当時若し原爆投下なくソ連の参戦なくして戦争が継続せられ本土決戦に於て企図する戦果を収め得たならば沖繩戦は実に鳥居元忠の伏見守城と其軌を一にし而かも其戦果は到底彼此対比すべくもなく実に甚大なものであつたであらう。

沖繩戦の戦果は地上部隊に於て我と約同等の損害を与へ艦船撃沈約六〇〇隻に及び而かも米大軍を約三ヶ月当面に拒止し我本土防衛に時間の余裕を与へた守備軍の奮戦敢斗のほどは之を以つて知るべきである。而

も形而上の収獲に於ては真に無限と云ふべきものがある。軍司令官牛島大將が其訣別に方り

皇国の必勝を確信して或は護国の鬼と化して敵の本土の来寇を破さいし或は神風となつて天かけり必勝戦に馳せ参す

そうして又部下に対して最後まで敢斗して悠久の大義に生くべしと述べ白双に當つては島の青人草は皇国の春に蘇らんと魂かへり魂かへりて皇国まもらんと歌い上げたのは本作戦参加戦歿軍民全部の最期の悲願と綿々たる大志を中外に訴へ世に伝へんとするものである。

即ち中外は之にすべて感奮し後世之につて興起するであらう。そうして沖繩復帰問題は申すまでもなく日本民族の外進出に多大の好影響を及ぼすべく殊に終戦後百八十年度転換して出直す民族の経営に対して限りなき支援を与へるであらう。

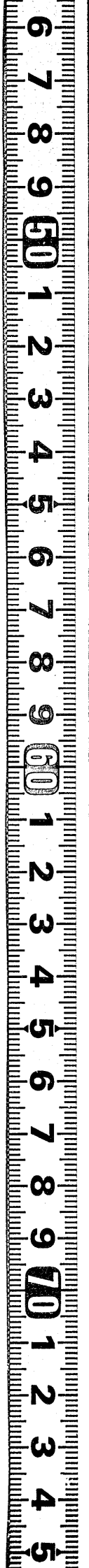
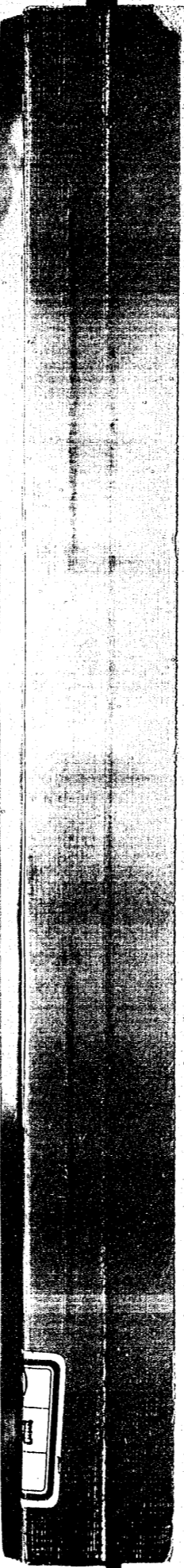
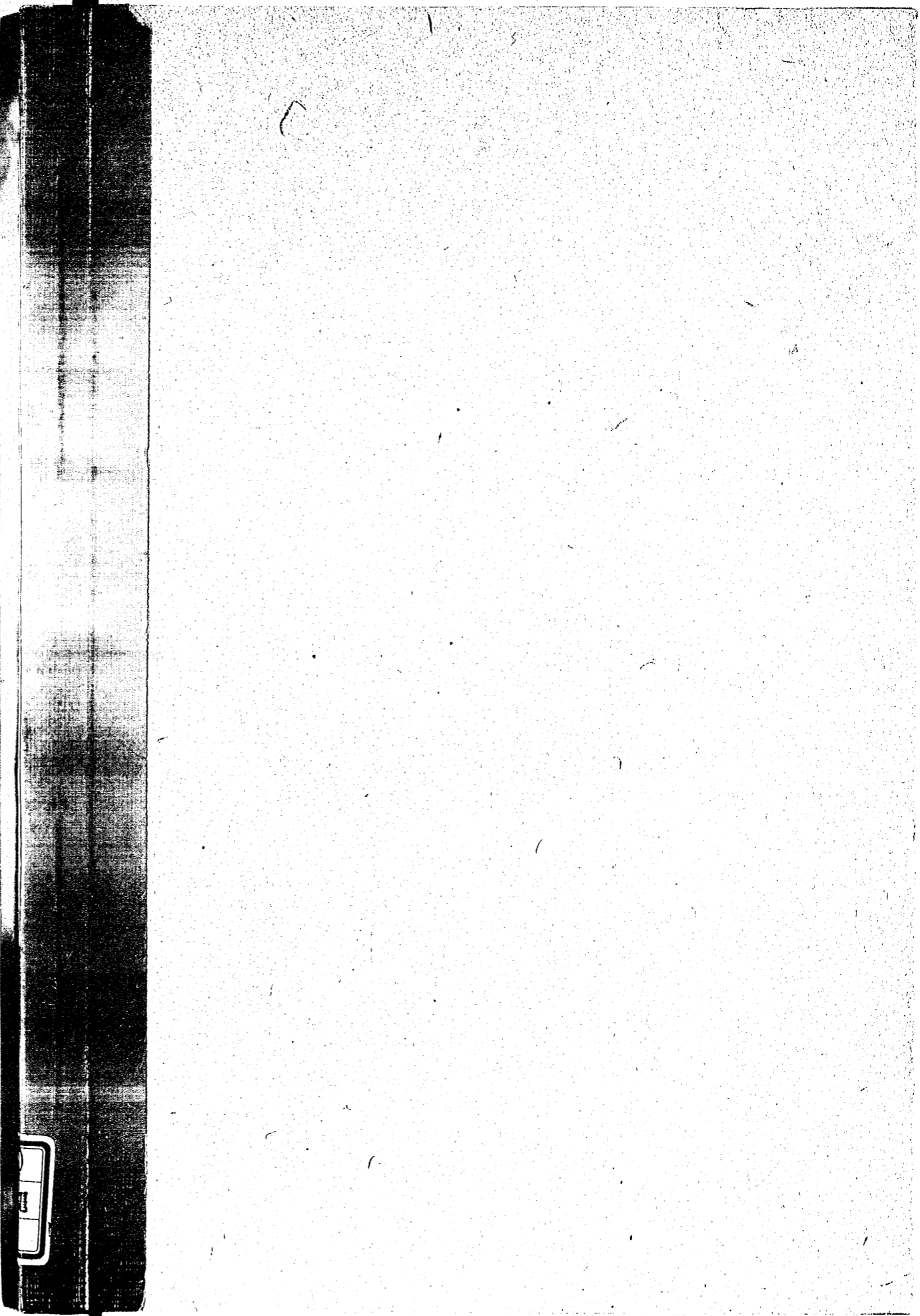
沖繩本島における日本軍総兵力約九万七千のうち約九万の將兵（内島民義勇兵約一万五千を含む）が玉砕し、その上島民非戦闘員の殉難は実に十五万の多きに達した。

これらのうち我が鹿兒島県出身陸軍関係戦没者は軍司令官牛島大將以下三千名に垂んとし海軍部隊七百有余名である。（元護国神社奉賛会事務局長）

印刷 昭和三十六年六月十五日 編集人 大山 宏

南方手帖社

鹿児島市西田町三三九



6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5